

九条の会

秋葉区「九条の会」事務局

新津教育会館内

新潟市秋葉区善道町2-9-44

Tel 0250-21-3691 Fax 0250-21-3692

<http://9jo.iinaa.net/index.htm>

秋葉区「九条の会」結成6周年

大震災・原発事故後の日本のゆくえと憲法の役割

記念講演 渡辺 治 さん（一橋大学名誉教授）

と き 12月3日(土) 13:30～16:00

ところ 秋葉区新津健康センター はつらつホール

2005年12月10日、「新津・小須戸9条の会」が結成され、まもなく6周年を迎えようとしています。事務局では、「秋葉区九条の会、結成6周年のつどい」を計画し、記念講演を「九条の会」事務局次長の渡辺治さん（一橋大学名誉教授）にお願いしました。

3月11日の大震災・原発事故は被災地のみならず、日本国民に大きな衝撃を与えました。二つの事故は、なぜこんなに深刻化したのか、救援・復旧はなぜ遅れているのか。大震災に対して、民主党政権はどう立ち向かおうとしているのか。それに対して私たちは何をなすべきか。大震災、原発事故と憲法にもとづく日本をつくる展望についてお話しします。

音楽コンサートも準備しています、お誘い合わせでお出かけください。



協力券(500円)への協力をお願いします

秋葉区「九条の会」は180人の会員でスタートしました。この6年間で約100人が増えましたがまだまだ小さな勢力です。これからもっと大きく前進できるような「つどい」になることを願っています。会員の皆さまから、「周りの人々にもはたらきかける」などのご協力をお願いします。

「秋葉区九条の会」の活動資金は、入会金(200円)と寄付金でまかなっています。入会金は入会する時だけですから、「寄付金」が活動を支えています。

講演会の企画や会報の発行には、活動資金が必要です。そのために「秋葉区九条の会」の活動を支える『協力券』を500円で発行し、多くの方々のご協力をお願いします。尚、「協力券」は講演会の入場券ではありません。後日、事務局が「協力のお願い」にお伺いしますので、よろしくお願ひします。

渡辺治さんの略歴

- 1947年 東京都生まれ
- 1972年 東京大学法学部卒業
- 1973年 東京大学社会科学研究所助手
- 1979年 東京大学社会科学研究所助教授
- 1990年 一橋大学社会学部教授
- 2010年 一橋大学名誉教授
- 現在 「九条の会」事務局次長

主な書籍

- * 『日本国憲法「改正」史』(日本評論社)
- * 『憲法はどう生きてきたか』(岩波書店)
- * 『「豊かな社会」日本の構造』(労働旬報社)
- * 『企業社会・日本はどこに行くのか』(教育史料出版社)
- * 『憲法「改正」は何をめざすか』(岩波書店)
- * 『憲法9条と25条・その力と可能性』(かもがわ出版社)

「秋葉区」九条の会代表委員・事務局会議の報告

9月10日(土)、秋葉区「9条の会」代表委員・事務局合同会議を開きました。会のこれまでの活動と会計報告をしました。周年行事、成人式宣伝、8月6日の広島原爆投下日の平和宣伝等、休まずに続けてきました。事務局会議はこれまで79回開きました。会報は2月に1回出し続け、会員の皆様にお届けしてきました。2011年8月で35号となっています。街中の会員には手配りで、離れている方には郵送をしてきました。180人でスタートした会員は、現在280人です。2011年度の繰越金は、94,396円、現在の残高は56,832円です。

(1) 日常活動をどうしたらよいか(2) 会員を増やすにはどうしたらよいかについて話し合いました。

戦争体験を聞くなどのミニ集を開く。すばらしい会報が出ているのだから、会員以外の人達へ届けたらどうだろう。フリーペーパーのように置いて、自由に取ってもらえる場所を増やせないだろうか。協力してもらえたい団体を増やそう。(新婦人、年金者組合、薬科大学、市職労、教会など) 若い人達と交流できないか。薬科大学などと、出かけて行ってお願いするしかないのではないか。会員にチラシ配布(5~10枚)をお願いするなどの活動を始めてみてはどうだろう。会員は増やさなければ自然に減っていく。意識的に増やしていこう。周りには9条の会に理解のある人がいるのではないか。結成6周年のつどいを大きく広げたい。会員に宣伝しているだけでは増えない。内向きの命名をしているのではないか。「6周年」と言えば「内向き」だし、「講演と音楽のつどい」と言えば「外向き」になるのではないか。財政がこのままでは底をつくので、6周年の集いを成功させたい。

平和のメッセージ

秋葉区のすみずみまで響かそう、
皆でつなく、平和のメッセージを!

詩集「曠野の生と死」あとがき より

高橋作衛(新町)

1945年8月9日、ソ連軍がスターリン戦車を先頭に満州に侵攻してきたとき、自称精鋭を誇る関東軍50万はほとんどいませんでした。本土決戦に備えて沖繩・その他に転戦していたようです。残された部隊も軍司令官山田乙三陸軍大將を始め闘う意欲はなく、自分たちの家族と身の保身しか考えていなかったようです。いちばん酷い目にあったのは最前線の部隊と開拓団、国境に近い町に住んでいた在留邦人たちでした。

私には7月末か、8月の始めに現役召集令が発令されていたらしいが、僻地でダム建設の技術者として働いていたので令状が届かず、幸か、不幸か、関東軍に入隊できませんでした。8月9日、ソ連軍侵攻とともに、関東軍宝清騎兵旅団に同じような未入隊の日本人が集まり、その人達とともに、陸軍予備役中尉を中隊長として、全員軍服に着替え武装して、特別の部隊を編成して戦いました。8月9日の戦いから、8月15日の終戦も認めず、72日後の10月21日までに様々の戦闘を経験しました。

1945年10月21日、まだ天皇の終戦の詔勅を認めず、戦闘を続ける同江部隊を、ソ連軍がスターリン戦車で取り囲み、武装解除を要求してきました。関東軍の参謀も加わった降伏勧告には従わざるを得ませんでした。

10月21日から翌年の同じ10月21日に、九州の博多に上陸するまで、軍隊からの離脱、逃亡生活、豆腐屋の驢馬代わり人夫、大豆搾乳工場人夫、農夫、放浪生活、乞食、泥棒、地方軍閥の傭兵、八路軍の傭兵などから、馬糞の粥まで食べて生きのび、食べなかったのは人の肉だけでした。苦難に満ちた生活の437日を、詩にまとめたのがこの詩集です。

私は帰国して41年後、教育公務員の定年退職の手続きのとき、誰も公務員の年金経歴に軍歴の加算を認定してくれる者はいませんでした。地球でたった一人になったこともあり、富錦同江部隊にひろわれて正規軍としての戦いもやりました。平和な世の中になっただけ、貴重な戦争体験が、私のその後の、人としての生き方を大きく変えたと思っています。

(1991年10月21日記)